アンソロジー

anthology

合歓（ねむ）

Vol. 7

http://nemunokai.net/

2011 夏

目　次

出会ひ……浅野純子……2
うつろひて…花……荒木絹江……4
ひともとの……石井宏幸……6
そよかぜ……井上悦男……8
春……植田桂之……10
盆のあとさき……梅田光憲……12
惜春……金尾一志……14
みちのくへ……小六誠一郎…16
十日戎……桜本滋子……18
四月……角南房子……20
早稲の香……高木幸子……22
猫が居る……高城登代……24
初蝶……谷口利子……26
ぶらりぶらりと……富阪宏己……28
陸の灯……長尾京子……30

ひい・ふう・みい…名木田純子…32
ひかりのなかへ……信里由美子…34
春……蓮岡健美……36
冬から春……與田武彦……38
倉敷……米元ひとみ……40
朝つばめ……渡辺牛二……42

生きていてくれてありがとう
……富阪宏己……44
先生の句を書き写して……
……米元ひとみ…49
円心集……石井宏幸……51
編集後記……渡辺牛二……52

出会ひ

浅野純子

末枯るる季節移ろふとはかくも
末枯の木々の間の電車道
鴨待つやいづこの空も青かりて
母と娘の話せかして暮早し

釣舟が寒明の光曳きゆけり
夏は来ぬ野路の花から路地の花
藤の花うす紫がつつましく
ピチポトン草を歌はす菜種梅雨
空をつき咲く木蓮に母重ね
五月雨や傘の花咲く通学路

うつろひて…花

荒木絹江

まだ辛夷固きは山の深さなり
親指のマニキュアはがす花疲
さぎ草のもう舞ひ立ちてしまふ朝
芒原風にしろがね移しけり

極まれる紅葉に五感放り出し
咲きすぎて白山茶花の力抜け
日溜りの石蕗の世界の揺れてをり
水仙の蕾日向に向きなほり
菜の花に触れて欠伸をかみころす
我が上に落花の風の道ありや

ひともとの

石井宏幸

潮湯の夏蝶翔ちしよりひとり
カルストの風棲む蛍袋かな
はたはたを沈めて草のそよぐのみ
淋しさにまた鵜の羽搏つ秋の風

冷やかに吹かれて水にかげ趨る
渡り鳥荒ぶる湖の点となる
稲雀てふ喧噪の移り来し
あをあをと茎を残して曼珠沙華
野紺菊甌穴そらを溜めゐたり
ひともとの芒となりて吹かれたし

そよかぜ

井上悦男

雨粒に朝のひかりや猫やなぎ
初桜お巡りさんに教へましよ
交番を出てよりひらく春日傘
立ち話ときどきまはる春日傘

蒲公英やこんなに狭き畦の道
遠足のおほきな声に道ゆづる
転ぶ子も転ばぬ子等も蝶の昼
転ぶ子は坂がだいすき若葉風
石鹸玉追ひかけられて追ひかけて
ふらここをみなゆらしゆく男の子

春

植田桂之

早朝の響く鐘の音冴返る

春浅し雨に濡れぬし石畳

玄関の仄かな香水仙花

夕間暮れ木蓮の白浮かび出づ

路地裏の明るき光桜草

枝揺らし葉を裏返し春の風

春落暉金色の帯海に解く

春風に吹かれ城壁巡る旅

新緑の映ゆる水郷舫ひ舟

新しき街になりけり花水木

盆のあとさき

梅田光憲

葭葦もわからぬままに簾吊る
潮騒を遠く置きたる夏座敷
父母に茄子の早馬仕立てけり
好きな事やつてゐますと墓まゐり

棚経の夕月色を得つつあり
帯ぽんと叩き踊の輪に入る
瀬戸大橋音頭も人気盆をどり
配られし団扇に活気づく踊
踊の輪いつしか膨れ切つてをり
漁火の少し濃くなる秋隣

惜春

金尾一志

水仙の白まつすぐな吐息吐く
落ち椿赤き吐息となり墜つる
下萌や鈍行で行く峠越え
セレナーデ流れて窓に春の雪

春の雪男は捨ててゆくものを
引く鳥や最後は任地なき辞令
惜春や涙で喉の詰まりしこと
山襞に白き風筋野は薄暑
朴散華空行く雲となり消ゆる
叱られし子の寝枕の梅雨湿り

みちのくへ

小六誠一郎

北風に空限りなく青くなる

天球の過半より雪吹き来たる

三月の海見晴るかす読経かな

あをあをと逆光となる麦畑

肯きて肯きて聞く合歓紅葉

やはらかきかたさ冬芽にありにけり

叔父の背のわが背に似たる冬菜畑

黒々と土をはぐくむ野焼かな

一叢の位置を菫の占めにけり

登校の列の分け入る霞かな

十日戎

桜本滋子

昨日より今日が穏やか初恵美寿
枡酒の程よく注がれ初恵美寿
初戎備中神楽たけなはに
初恵美寿駅より人の波うまれ

歩くたび福笹鳴りぬ神の庭
福笹の福を零さぬやうに持つ
福笹の鈴に句作を促され
福笹の鈴鳴らす風ついてくる
出口まで人波に添ひ初恵美寿
残り福世相の風を押しのけて

四月

角南房子

小流れの雪解の音となつて来し
明るさを今日の色とし春めける
花種をふれば見えきし花の色
白鷺を一羽立たせて麦青む

足音の集まつて来る四月かな
水底の影のゆらめき蝌蚪生るる
一撃の声にたかんな目覚めけり
抽斗へ過去を仕舞ひて更衣
雲ひとつ立夏の風を運びけり
街騒をかき消してゆく緑雨かな

早稲の香

高木幸子

春雨や一打に余す島の鐘

みすゞ忌やもみ手でうたふ鯨唄

なにげなく見つけてよりの蕨狩

三千戸消えし銅山つつじ燃ゆ

ぼうたんを胸に漢の牡丹売

木酢瓶置かるる窯場夏兆す

とも綱の限りの蓴採りにけり

田掻牛角に鉢巻して来たり

早稲の香や牛舎に分娩予定表

分校の島の渡船に寒卵

猫が居る

高城登代

岩島につかず離れず海鵜の巣
牽牛花ビル迷ひなく昇りける
水音を聞けば秋なる音となる
花梨の実ころがる床や猫が居る

秋の暮振り向きもせず猫通る
山眠る船は出づ出ず鞆の浦
二人居の猫と炬燵とみそ汁と
ほど良くに人集まりて針供養
薔薇垣の奥へと行ける猫の風
訪ふ家は花かんざしの咲く坂に

初蝶

谷口利子

初蝶の草より翔ちて黄なりけり

大き手も農具の一つ柏餅

呑めさうな水を引きたる植田かな

汗拭けば疲れし顔のちさくなる

雷鳴に一瞬町がちぢみけり

鰯雲組体操の立ち上がる

青天へ矢を放つごと鵙高音

過去未来行つたり来たり毛糸編む

青空に冬芽ふくらむ音を聞く

初蝶や晩年へ日々鮮らけき

ぶらりぶらりと

富阪宏己

御降や雲間に星を見せながら
底冷やジャズの音色の沁みゆきて
一閃の風寒禽の声となる
冴返る艶めくものの香を消して

本心は絵踏も辞さぬものなれど
テーブルの雛寄せられて句座となる
家一歩出るより花の旅となる
草原を海を渡るが如く蝶
熊蜂の一点風をとどめたる
とみちやんと呼ばるる飯屋にも幟

陸の灯

長尾京子

鳶のそら蒼々と麦踏みにけり
陸の灯の花の如くに春となる
稜線の見上ぐる雲に夏来る
じやがたらの花の分けたる地と空と

咲き初めや白き雲より百日紅
南瓜の化粧よろしき床の上
手直しの服仕上がりておでん鍋
海めがけ水仙の花かけくだる
鐘打ちて離るる音の去年今年
鐘の音の真暗闇より福寿草

ひい・ふう・みい

名木田純子

山昏し一つ椿の落ちてより
白魚の目の二つづつ泳ぎけり
はや影に置いてゆかれし三尺寝
使ふあてなき角磨く犀四温

七草にマリア灯籠埋もれり
花八手これより森の暗きへと
母の背を越えて十三詣かな
百草丸ひさぐ木曽路や秋深し
遺跡出で千年ぶりの春日受く
万の薔薇かをり一つの風となる

ひかりのなかへ

信里由美子

夜鴉の啼いて山河の朧かな

みよし野の木霊降り来る花の闇

天と地のあはひを花の散りやまず

花散るや天の静けさ零すかに

天ッ地のひかりのなかへ雪解川

鍬入れし春田に未来眠りをり

耕の野に黒土の光りけり

芽柳の風になること覚えをり

幾層に浮力重ねて若楓

さやさやと新樹ひかりの音をもつ

春

蓮岡健美

茶を啜り何見るでなく日向ぼこ

七色の声もてをりし春の猫

春の夢信楽焼の狸にも

神秘なる色も春めく山湖かな

稜線の寝釈迦のやうな姿かな

藁屋根のぺんぺん草を育てをり

ひつそりと竹の秋なる山祠

目つむりてゐるよな町の朝霞

山裾を登る二三戸遅ざくら

鳴きもせず枝の鶯飛び立てり

冬から春

與田武彦

短日に有楽町で映画見る

よく見るとみんな違ふよ鴨の顔

牛どんを卒寿と囲み福寿草

初詣二人で歩く由加古道

大寒や法話を聞きて由加古道

北風や津田の松原見事なり

紅梅やゆつくり歩く雨あがり

春の朝我が庭匂ふ白き花

青き空ミモザが咲いて鳥の声

初桜庭から眺め平和なり

倉敷

米元ひとみ

光りもの売る底冷の石畳

からつぽの冬を飾りて金鈴子

冬帽子ぶらりとジャズの扉押す

いにしへの冬の日差しや珈琲館

中庭はそらの入口春隣

春光を染めて倉敷ガラスかな

舟頭にひかりを返す春の水

春雪に水色の空ひろがれり

雨の日の雛に一息ありにけり

春装の膝にひらきしプログラム

朝つばめ

渡辺牛二

朝つばめ川面の影にふるるほど
子目高のピリオドほどが泳ぎけり
青嵐トトロ出さうに木々揺れて
蛇の衣またあり更に長かりし

種ひたす机の上の洗面器
集まりて静けさ増しぬ糸とんぼ
水澄んで水の影ある水の底
威銃犬と一緒に撃たれけり
猪出でしことは日常婆笑ふ
冬座敷一人灯して一人消す

生きていてくれて ありがとう

富阪宏己

昭和二十年八月六日の朝、私は何処にいたのだろうか。
当時二歳だった私には、その記憶のカケラさえない。
いつ、誰から聞かされたのかは忘れたが、私は玉野で生まれたらしい。
私が生まれてすぐ、赤紙で招集された父は兵隊となり、ボルネオへ輸送されたらしい。
残された母と私は玉野で暮らしていたが、戦況は悪化の一途。
ついに本土決戦となり、敵軍のローラー作戦は、主要都市を次々と死の海と化していった。
岡山大空襲があり、水島の空襲があり、空襲警報に右往左往の日々だったようだ。
なんといっても、玉野には三井造船所があり、日比精錬所がある。
いつ、爆撃されるか、生きた心地はしなかっただろう。
だから母は、郷里・広島の田舎へ疎開を決めたに違いない。
祖母の弟、母から言うと伯父、私から言うと大伯父の住む志和町の山奥へ移り住んだ。
といっても、一切を私は憶えていないのだが。

★ ◆◆ ★

「六日の朝あ、よう晴れとってのお、真っ青な空じゃった。山畑あへ着いて、ほっとした時じゃった。おそろしゅう派手な稲光りがしたんじゃ」
爆心地から、三〇キロも四〇キロも離れた田舎。
キノコ雲こそ見えなかったが、広島県の空は異様な光りを放ったに違いない。
大伯父こと志和のオッサンが、この話をした時、私を伴っていたと言った気がしてならない。
私も六日の朝の広島の空を見たと思うのだが、志和のオッサンが、いつ、どこで、この話をしたのかも憶い出せない。
確かめようにも、志和のオッサンはとっくに死んでいない。
父も母も死んだ。
叔父も叔母も死んだ。
幼かった頃の私を知る人は、みんな死んでしまった。
生きることは振り返ることではない。
明日をみつめて生きることだ。
そう言い聞かせて、ひたすら生きてきて、あの頃の志和のオッサンの年齢となった今、何故か、人間の死について思うことが多くなった。
それは、共に生きてきた人が、一人死に、二人死にと、この世から去ってゆくからだろうか。

★ ◆◆ ★

志和と言えば、いつも葬儀をしていた気がする。
葬式の時ぐらいしか、片田舎の志和まで出向くことはなかったとも言える。
そして、その葬儀がやたらと多かった。
志和は片田舎。
みんな広島の学校へ進学し、広島で働いた。
志和のオッサンも、広島の役所を定年して、百姓をしていた。
八月六日、国鉄で働く志和のオッサンの息子は、機関車の中で被爆した。
娘は、学徒動員で徴用されていた工場で被爆した。
親族のほとんどが広島の街に出ており、例外なく

被爆した。
娘の方は遺体すら見つからなかったが、息子は全身に大火傷をしたものの、命はとりとめた。
あまりの熱さ、痛さに耐えかねて、太田川へ飛び込もうとしたが、全身焼けただれた人々が殺到し、飛び込む隙間もなかった。
息も絶え絶えになって、さまよい、次の日やっと志和へ辿り着いたものの、半年もせぬ間に死んでしまった。
祖父も、志和のオッサンも、身内の生存を信じ、人間を焼く匂いの立ちこめる、廃墟と化した広島の街を、くる日も、くる日も歩いた。
奇跡的に助かった人も、十年後、二十年後、原爆症で死んだ。そのたびに、葬式があった。
志和ではいつも葬式をしていると、私は思っていた。

★ ◆◆ ★

葬式では、誰も原爆のことには触れなかった。
「宏己んとこにゃあ、競輪があるんじゃってのお」
「隣の児島市にゃあ、ボートもあるでえ」
「ほお。ボート言やあ、競艇のことじゃのう」
志和のオッサンが、話題をとんでもないところへ向ける気持を、皆んな知っており、訳もなく同調し、笑ってみせた。
「いっぺん、宏己ちゃんとけえ、行ってみんさりゃあええのに」
ひととき、日が差したように座が和むのだった。
しかし、死因はいつも八月六日の被爆。
どんなに避けようとしても、避け切れない。
仏の生前を語れば、八月六日は黒い膿のように流れ出てくるのだった。
「ピカは人間が人間を殺そうとして、落とされたんじゃ」
懸命になって抑えていた怒りが、ほんの僅かな隙

から噴き出してくる。
「広島の人間を皆殺しにするんが、目的じゃったんじゃ」
「助かった人間は十年、二十年かけて殺されていくんじゃ」
嘔吐した黒い血のように、ぬめぬめと座に染みわたり、女性の嗚咽の波を拡げてゆく。
「ウチのも、子供等あも、みいんな死んでしもうて、なんじゃゆうて、ワシだけ生きとんじゃ」
自分で自分を罵る声は、怨念とも、自虐ともとれる、暗く痛ましい呻きだった。
私には、けっして理解することのできない、深くて暗い罪の意識で、この座の人々は繋がっているのだろうか。
座はしいんと静まりかえり、不可解な納得をしているのだ。
大切な人が、もがき苦しみながら死んでゆくのを、どうすることもできず、見殺しにしてきた者の、とりかえしのつかない悔恨なのだろうか。

★ ◆◆ ★

三月十一日、東日本に想像を絶する巨大地震が発生した。
高さ二〇メートルに近い高波が、街を呑み尽くす光景は、現実のものとは思われなかった。
現実感を帯びるまでには、長い時間を要した。
私が、昭和二十年八月六日の空を、見たのではないかと思い始めたのは、三月十一日の地震を映すテレビ画面に、青い空を見た時からである。
テレビには映っていない空が、見えたからである。
その、悲しみを予兆するかのような青は、八月六日の朝以来、私の脳裏に焼き付けられたままなのだ。
志和の人たちが、亡くなったと聞くたびに、青い

空の色が脳裏に描かれたのである。
きっと、志和の葬儀のたびに、青い空の色を反芻し、悲しみの予兆の色として、私の脳裏に焼き付けてきたのかも知れない。
その、原点が志和のオッサンと見た八月六日の空の色だと、思い込んで来たのかも知れない。
そもそも、八月六日の朝、志和のオッサンと一緒に山畑へ行ったかどうかさえ、定かではないのに、青い空の色だけが、私の中を生きてきたのである。
志和のオッサンの、「あの日の広島の空はよう晴れて真っ青じゃったのお」の一言が、私の胸に染み入ったのだ。
廃墟と化した広島の街を、くる日もくる日も身内を探して歩いた、志和のオッサンの気持が「あんなに真っ青な空から」と言わせたのだろう。
きっと、原爆によって親族を奪われ、奪われてゆく志和のオッサンの哀しみを、私は青い空に重ねていたのだ。
三月十一日の東北の夜空は、美しい星に満ちていたと聞く。
家族も家も、何もかも、何もかも一切が沈んだ水面を照らす、美しい星影を茫然と見つめる人に、私は強くなれとは言えない。
ただ一言、「生きていてくれて、ありがとう」と、言いたい。
そう言える希望を、日本中の人が探しているのかも知れない。
否、世界中の人が。

合　掌

先生の句を書き写して

米元ひとみ

合歓の会へ入れて頂いて、まだ日の浅い頃だった。先輩方が、
「さっ、報告句を詠みに行きましょう。」
と冗談を言って吟行を始めた。
私はそれまで独学でぼんやりと俳句を詠んでいたので、このお洒落なジョークにとても心を動かされた。
吟行の達人の先輩方は、報告句に終らないようにと、いつも気をつけておられるのだ。
では、報告的でない句とは、どういう句なのだろう。

街路樹を走らせてゐる青あらし
風花の解き放たれてをりにけり

先生は、五感を研ぎ澄ませて、青嵐や風花のただなかに身を置かれていたのだと思う。
美しいこの様子を、ここにいない第三者へ言葉で伝えるにはどうしたらよいか。勝負は中七、たった七文字しかない。
吹きつけられている枝々を、遊んでいるような風花を、先生は注意深く写生し、そこにご自分の感情も重ね、一番ふさわしい七文字を練り上げられた。
だから、この句は、映像を見るような瑞々しさで読み手に迫ってくる。
写生を超えて初めて、句は報告から抜け出せるのではないだろうか。

うすらひに日のうすうすと乗つてをり

可憐さの寄りかたまりて夏あざみ
ヨットまだ風の機嫌をとれぬまま

俳誌「旭川」や朝日俳壇の先生の入選句をお借りして、小筆で書き写していた時期がある。書き写しながら気づいたことは、いずれもリズムがよく、書いて美しいということであった。まさに俳句は韻文だと、改めて思わされた。先生の句は、写生を越えた上に調べも姿も美しいのであった。

教室の私語を悲鳴にしたる雷
似顔絵師さつと祭の顔を描く
短日のテールランプの列にゐる

また、俳句は省略の文芸だと言われる。では、省略の効いた俳句とはどのようなものなのか。言葉で説明するのは難しい。そんなとき私は、書き写した先生の句から、この「教室の私語」や「祭の顔」「テールランプの列」を再読する。省略のゆきとどいた句を読むと、自分の中で想像が広がり、しばし句の余韻にひたることが出来る。

私はしだいに、俳句とは教わるものではなく、場を踏んで人のうしろ姿（人の句）からすべてを学ぶものだと思うようになった。大好きな合歓の会の方々と、これからも俳句を楽しんでゆきたいと思う。

円心集

石井宏幸

雪晴の光の中の一戸かな　宏幸

『「円心集」を読む　吉村玲子』を、この三月に著者から贈呈いただいた。

私も毎月参加させていただいている、稲畑汀子邸における野分会芦屋例会終了時にである。吉村氏は円虹誌の編集長を平成十六年から務められている。円心集というのは招待作家と円虹雑詠の巻頭者の句を鑑賞する企画で、山田弘子前主宰が亡くなられるまで四年間続いた。その四年間の連載を、さらに著者が鑑賞したものを一冊に纏められたのである。

冒頭の句は、平成二十一年五月号で私が初巻頭となった句。弘子前主宰から「焦点の絞り込みが巧まずして出来ている」と評された。吉村氏からは「青空もいっそうまぶしく穢れがない」と鑑賞された。

清盛の開きし瀬戸の海髪揺らぐ　宏幸

円心集に五句出句した中で、特に吉村氏に鑑賞された句。「歴史的な背景と眼前の季題を組み合わせ句に拡がりを持たせている。」とされた。いただいた本により、短い句歴ながら改めて自分の俳句の軌跡をたどることができた。吉村氏に感謝申し上げるとともにますますの御発展を祈り申し上げたい。

窓に置くとは遠き子に置く聖樹　宏幸

平成二十三年四月号で二度目の巻頭となった句。山田佳乃現主宰からは「置くというだけでこれだけの余韻が伝わる。親心とクリスマスの詩情がしみじみと響く」と評された。

また、句作に励みたい。

編集後記

◆東日本大震災で被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。復興はもとより、余震の無い安息の日々が一日でも早く来るように願ってやみません。

◆ネット上に、震災に関する俳句の投稿サイトが、いくつも出来ました。私も何句か投稿しました。が、結局は机上俳句から逃れられず、自己嫌悪に陥り止めてしまいました。

◆この未曾有の震災に対して、俳句で何が出来るか、俳句の持つ力は等の記事を目にしますが、少なくとも私にはそのような大それた力は無いと実感したしだいです。

◆俳人の高野ムツオさんが被災されて、避難所暮らしをされているとお聞きしました。その高野さんが「俳句」五月号に震災の句を寄せておられます。その中から俳句の力を感じる句を三句ご紹介します。

車にも仰臥という死春の月
瓦礫みな人間のもの犬ふぐり
陽炎より手が出て握り飯摑む

◆俳句番組の入選句にも時々被災された方の句が入りますが、やはり実際に経験し、その場で詠まれている句には力を感じます。

◆私は災害の少ない晴の国おかやまに生まれ育ち、のほほんと暮らしています。今はそのことの幸せを、詠み続けて行く外はないのでしょう。

◆被災者の方々には何の役にも立ちませんが。

降りさうで降らぬまま暮れ半夏生

（牛二）

アンソロジー合歓　Vol.7

平成 23 年 8 月 1 日　発行
発　　行　合歓の会
発行責任者　富阪宏己
印　　刷　弘文社
　　岡山県津山市

連　絡　先
〒 701-0304
岡山県都窪郡早島町早島 3991-144
富阪宏己方

次号締め切り
　平成 23 年 11 月 31 日
原稿送付先

　〒 708-0015
　岡山県津山市神戸 719-7
　渡辺牛二
Email : info@nemunokai.net
Tel.　: 090-8710-7067